
失恋

魅零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失恋

【Nコード】

N5819G

【作者名】

魅零

【あらすじ】

あたしは失恋した。大好きな人。その想いは何日経ってもきえはしない。どうしてかな。嫌いになりたいのに嫌いになれない。

プロログ（前書き）

読まれる前に謝っておきます。

ごめんなさい・・・

未練たらたらなんです、この話…

少しでも共感してもらえればそれでいいです。

プロログ

嫌いになれない。

忘れられない。

好きって言えない。

言っちゃだめな気がする。

根拠なんてないけど。

『新着メール 01件』

もしかしてあの人??

そんなはずないのにね。

『美幸』

ほらね。

メールなんかくるわけないのに心のどこかで期待してしまっつ。

そお、あたしは別れた。

あたしの名前は大谷はずき。

あたしと別れたのは学校でそこそこモテる奴。

塚田剛輝。

〇1話

あたしと剛輝は3ヶ月くらい前に付き合い始めた。

告ったのは剛輝の方から。

付き合い前からあたしらは仲がよかった。

そのときのあたしは、大好きな人に別れを告げられてつらい時期だった。

そんなあたしの相談役だったのが、剛輝。

いっぱいいっぱい話を聞いてくれた。

逆に剛輝の悩みはあたしが聞いてあげた。

いつしか、あたしにとって剛輝はかけがえのない存在になっていった。

そして、あたしが前の彼氏と別れて2ヶ月くらいたったあと、あたしは剛輝に告られた。

でもあたしは剛輝のこと、恋愛感情的に好きではなかった。

けど、あたしのことを好きって思ってくれた気持ちが嬉しくて付き合い合うことにした。

それからというと剛輝は毎日のようにメールをくれた。

何気ない話ばかりだったけど、その時間がとても楽しくて剛輝はあたしの心の拠り所になった。

クリスマスは一緒にすごしてない。

あたしから誘うなんてできるわけない。

そんな勇気ないもん。

クリスマスの夜。

いつもと同じくらいの時間にいつものようにたわいもないメールをした。

そのとき、あたしはいらついた。

だってクリスマスだよ??

一緒にすごしたいのが彼女だよね。

なのに、クリスマスのクの字もでない。

あたしは、剛輝とのメールを途中でシカトしてしまった。

今では悪かったって思ってる。

次の日、あたしは寝ちゃってメールおちたことにして剛輝に謝った。

剛輝はあたしのことを信じて許してくれた。

数日かしてあたしと剛輝は初めて電話をした。

『もしもし。』

『誰ですかあ??笑』

『大谷ですッ』

『ええ??』

『もお!!--!』

『ごめん、ごめん。』

01時間くらいどうでもいいけど、楽しい話をした。

でも、途中真剣な空気になった。

『俺なんかと付き合ってるいいの??』

『えッ?!なんで??』

『だって、まだ元カレのこと…』

『引きずってなんかないよ。』

『ほんと??』

『うん』

『もし、俺と付き合いたくなかったら。』

『何??.?』

『はっきり俺を振っちゃって。』

『今すぐでも??笑』

『うッ』

『嘘だよ。』

『びっくりしたッ』

『あはは。ごめんね。』

『俺、信じてるから。』

『…わかったよ。』

『信じてる。』

『うん。』

剛輝の>信じてる<っていう言葉を胸にあたしは剛輝と真剣に付き合おうと決心した。

02話

01月になって。

あたしたちは新しい年を迎えた。

剛輝とは、まあメールだけでしかつなげてない。

正直、冬休み中は剛輝に逢いたかった。

けど、そんなわがまま言えない。

毎日のようにメールしてたのに、01月のはじめメールを02日間しなかった。

今まで、メールは剛輝から。

って決まってたからあたしからメールはしなくていいなんて思っていた。

02日後のメールの剛輝はいつもと違った。

『1つ聞いていい?』

『うん、いいよ。』

『俺のことほんとに好きか?』

体に電撃がはしった感じがした。

『なんで?..?』

『いいから。』

そのとき、素直に剛輝のこと好きって言えば良かった…

『嫌いだったら付き合ったりしないよ。』

『そっか。だよな。変なこと聞いてごめん。』

『ううん。』

剛輝ごめんね。

剛輝はあたしに自分の想いを素直に伝えてるのに。

あたしはこんなに臆病で。

剛輝のこといっぱい傷つけたね。

それから02人の仲は修復した。

けれどあたしは心のどこかで剛輝と元カレを比べてしまう。

剛輝は剛輝で良いところがたくさんあるのにね。

いつしか、あたしと剛輝は教室であまり話さなくなっていた。

『聞きたいことがある。』

またもや剛輝からの問うメール。

『なあに ？？』

あたしは明るく振る舞った。

『俺のこと避けてない？？』

『全然！！避けてなんかないよ？！』

『よかったあ。』

『心配かけてごめんね。』

『いやいや、俺の思い込みだし。』

また剛輝のこと傷つけちゃった。

あたし最低だよ。

03話

教室であまり話さなくなったと言っても一緒には帰っていた。

手エつないだり、チュ　したりはしなかったけど話はすごい弾んだ。

部活の話とか、テストとかお化けの話、テレビのこととか。

客観的に見たら、付き合ってる仲には見えないかもしれない。

けど、あたしにとっただらすごい楽しくてたまらなかった。

二人とも部活が忙しくてなかなか一緒に帰ることができなかったから。

電話は、あたしのお母さんがすごいくちづるさい人だからできない。

連絡とるにはほんとメールだけ。

02月になって剛輝の誕生日を迎えた。

あたしは超がつくほどの照れ屋だから誕プレをあげることができなかった。

仕方なくあたしはメールでお祝いする。

0時00分に。

ロマンチックでしょ。

メールちゃんと送ったけど、返事は返ってこなかった。

当然、寝てたよね。

その日、家に帰ってからメールがきた。

めっちゃめっちゃ感謝された。

誕プレあげてないのに。

やっぱり剛輝は優しいね。

大好きだ。

どこが好きかなんてわからないけど。

どこかと言えば全部かな。

こんなに心の中では素直に好きって言えるのに、伝えることができない。

想ってるだけじゃ相手に伝わりはしないのに。

バレンタインはちゃんとあげた。

あたしの手作りのチョコレトケキを。

見た目は変だけど、味は確かなんだから。

でも、手渡しじゃない。

心臓が飛び出しちゃうもん。

友達に渡してもらった。

おいしかったって言うてもらえてよかった。

○4話

それからあたしらは数回帰ったけど、あんまり進展はなかった。

あたしは不安で仕方がなかった。

だって剛輝はいろんな女の子といっぱいメールしてたし、話したりしてたから。

あたしなんかよりいい子なんていっぱいいるし。

ある日、あたしにいきなり元カレからメールが届いた。

それまでは剛輝以外の男の子とは全然メールしてなかった。

別にたわいもない話しかしなかったけど。

けど、2週間くらいして元カレに告られてしまった。

もちろん振った。

剛輝以外の人なんか受け入れられない。

好きだもん。

剛輝に伝えるべきかすごい迷ったけど、伝えることにした。

『ちよつといい ？？』

『うん』

『誰にも言っただけじゃないんやけど…』

『何？』

『元カレに告られた。』

『そっか。』

『はずきの好きなようにしね。』

『あたし、剛輝と別れる気ないから。』

『わかった。』

何それ…

そっけなすぎるやろ。

もし、あたしが元カレと付き合っちゃってもいいってことなの？？

とめてよ。

いやだって言ってよ。

もうあたしのこと好きじゃないの？！

この日からあたしは自信をなくした。

もう剛輝はあたしのことなんか見てないって。

呆れてるって。

目させあわせてくれないし。

剛輝なんか……嫌い……。

嘘だけど。

こんなあたしのこと嫌わないでね。

それから、前よりメールも話もしなくなった。

3週間くらい一緒に帰っていない。

教室の中では、まるで他人のよう。

学校にいる途中、あたしは何回も涙目になった。

あたしら、このまま終わっちゃうのかなあ。

やだよ、剛輝……

〇5話

03月14日

今日はホワイトデー。

あたしは朝からわくわくしていた。

だって、剛輝からなんか貰えるかもしれないからッ

それだけであたしの心は踊る。

実は昨日、剛輝から久しぶりにメールがきてたんだ。

『ねえ、明日何時に部活始まる??』

『えーと…』

『08時くらいかなあ』

『わかったッ』

『うん（ ）』

『渡すね??』

『えッ??』

『なんでもないや』

というように。

あたし、最初はホワイトデーの存在なんか忘れていた。

だから、

『えッ??.?』

とか心ないこと送っちゃったんだよね。

剛輝、傷ついたかもしれない。

どうしよ。

あたし、バカだ。

まあ、明日になれば大丈夫だよ!!

たぶん…

あたしは抑えきれない気持ちと不安な気持ちが悪く交錯する中、眠りについた。

そして、今日になった。

いつものあたしなら、部活しに行くくらいはあんまり外見を気にしないんだけど、今日は違う。

気合い入れて、朝シャンして髪を緩く巻いて、眉いじって、まつ毛クリンクリンにして。

01時間半はかかった気がする。

早起きたし、いつもは始まる05分前くらいに体育館についていたけど、今日は40分前に家を出た。

車で学校に向かう。

10分で行くくらいの距離にある学校。

朝早いから、そんなに人は居なかった。

体育館前で降りしてもらおうと剛輝らが所属する部活はもう始まっていた。

早ッ！！！

どうしょッ

剛輝は…居た。

必死にボールを追いかけている姿がそこにはあった。

あたしは仕方なく、体育館の中に入っていく。

それから03時間ほどの部活をあたしは乗り越えたけど、剛輝はまだ部活中。

長い！！！！

あたしは友達に頼んで01時間ほど、待つことにした。

友達と輪をつくって話していると、01人の女の人があたしらのところへ近づいてくる。

誰？

「久しぶりやの〜」

友達の01人の頭に手をかける。

「えっ?!」

あたしの友達も分からないみたい。

「あの、ほらッ塚田。」

いっせいにみんながあたしに振り向く。

「っ…塚田。」

戸惑うあたし。

剛輝のお母さんじゃん。

若いからわかんかった。

見た感じ、33歳くらい。

何歳の子だったの。

あたしのお母さんと10歳くらいの差がある気がする。

剛輝のお母さんはあたしらに手をふってどこかへ行ったしまった。

それからあたしらは01時間待ったけど、終わる気配がなくて帰ることにした。

そのあと、剛輝からメールもこない。

今度こそ終わっちゃったのかな。

一筋の涙が頬を伝った。

06話

夜になっても、なんもメールがきてない。

いや、あたしが悪いんだけどね。

ホワイトデーから03日たった17日。

あたしはいつも通り学校に行った。

今は剛輝の隣の席で少し気まずい。

それからお昼休みになって。

あたしは給食の片付けに行った。

その時、何故か剛輝が悲しそうな顔をしていたのを今でも覚えてい
る。

01階まで食器を戻したあと、あたしは教室に入ろうとした。

けど、入れなかった。

だって、クラスの女の子になにか渡していたから。

その女の子は、あたしと幼なじみの愛未。

あたしにはなんもくれなかったのに。

そんな勘違いをあたしはしてしまった。

あたしはそのまま気付かなかつたふりをして、教室の前をとおりすぎていく。

06時間目になって、愛未があたしに手紙をくれた。

嫌味かッ

って思った。

手紙には

『はずきに渡したいものがある。
いつあいてる?』

だって。

意味分かんない。

あたしは適当に

『放課後に』

って返しといた。

そして放課後。

愛未からもらったものは…

剛輝からのものだった。

「塚田が、遅れてごめんだって。」

「……………」

やらかした。

中には可愛い小物がいっぱい入っていて、あたしは胸がギュツて締め付けられた。

帰って、メールをひらいてみると

『新着メール 01件』

朝の07時にきてる。

それも、剛輝から。

『遅れたけど、

お返しあげる。

昼休み教室にいて）（

期待してて』

って…

自分の馬鹿さ加減に呆れる。

あたしは心の中でいつも剛輝のことばかり責めていた。
でも、責められなきゃいけないのはあたしの方だ。

どれだけ剛輝の気持ちを踏みにじってきたんだろう。

あたしは急いでメールを返した。

『メール気付かなくてごめんね!!』

お返しもらったよ(*p q)

ありがとねッ』

01分もしないうちに剛輝からの返信がきた。

『いいよ』

『ありがとッ』

そのまま返事はこなかった。

07話

それから20日間くらいたっても剛輝からの返事はない。

これは自然消滅だと思えない。

メールでしか02人はつながっていなかったのに、それもなくなったら付き合ってるって言えない。

あたしは決心した。

別れをきりだそう。

まだ剛輝があたしのこと好きでいてくれたらとめてくれるはず。

このままの状態やったら剛輝に苦しい想いをさせちゃうから。

この時のあたしは、別れるという手段しか思いついていなかった。

もし、他の方法を見つけていたらラブラブになれていたかもしれないのに。

そして、剛輝にメールを送る。

何回もおじけづいたけど。

『別れよつか???』

30秒もしないうちに

『うん』

って。

なんの迷いもなく承諾しちゃうんだ。

悲しくなる。

あたしはメールをおわらせたくなくて、

『わかった』

って送つといた。

『01つ聞いていい?』

剛輝が質問してくる。

『いいよッ』

『なんで?』

『別れる理由?..?』

『そっ』

『つらくなつたから。』

『ごめん。』

『うづん。』

『じゃあ、なんでつらかった?』

『剛輝は、いろんな女の子とメールとかしてたで不安やった。』

『そっか。ごめんの。』

『いいよ。』

そこでメールは終わった。

そこで気がついた。

距離おくとかにすればよかったって。

後悔の嵐…

今日からもう剛輝とメールすることも話すこともないんだ。

そう思うと悲しすぎて涙もでなかった。

最終話（前書き）

いよいよ最終話です\$、”

微妙すぎる最後ですいません・・・

最終話

剛輝と別れてから数か月。

あたしはもう中03。

学校ではたまたまに剛輝と逢う。

気まずくて、あたしは目もあわせることができない。

剛輝はあたしなんかよりもっときついよね。

しょ もない理由であたしなんかに別れられて。

怒ってるよね。

剛輝の気持ちをあたしは知らないけど、あたしは剛輝のことまだ好きでいる。

誰にも言わないけど。

あたしは剛輝の幸せを願うことにした。

そうでもしないとまた思い出しちゃうから。

どうしても思い出してつらくなったときには、嫌になるまで泣き続ける。

そうやって発散しないと精神がもたないから。

心のどこかでは期待している。

まだ剛輝はあたしのこと

なんてあるわけないけど。

剛輝、何年たっても君のことは忘れない。

剛輝を傷ついたことは一生償っても駄目かもしれない。

剛輝があたしのことを少しで好きになってくれてありがとう。

相談聞いてくれてありがとう。

メールシカトしたの、ごめんね。

素直に自分の気持ちを伝えることができなくてごめんね。

遊び、いっぱい誘ってくれたのに、いっぱい断ってごめんね。

なんかあったとき慰めてくれてありがとう。

君に出逢えたことに感謝します。

そろそろあたしも前向きに生きていかないと。

いつまでも剛輝のこと引きずっていたらかわいそうだし、剛輝に迷惑がかかるから。

けど、忘れはしない。

剛輝は今、誰のことを想っていていつ、そのために傷ついているの???

あたし、応援するから。

剛輝が幸せになりますようにって。

剛輝が幸せになること。

それはあたしにとっての幸せにもなるから。

■最終話（後書き）

少しでも読んでくれた方ありがとうございます（*p q）

更にコメントしてくれると嬉しいです

感想、指摘などなど。

つまらなかったかもしれませんがちょっとでも共感してくれたらいいです。

長々と読んでくれてありがとうございます（・・・）

いい恋してください（*・、・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5819g/>

失恋

2010年10月28日08時31分発行